

歌劇 「卒業 55 年目の集い」 (2015.10.21~22)

～東北大学機械工学科 昭和35年卒業生 同級会報告～

演出・振付:金森昭士

序 曲

我々昭和35年卒業生は、毎年暑気払いと称して関東地区で開催し、5年毎の節目の年は一泊泊まりの同級会を開いてきました。昨年夏の横浜での同級会で、2015年は卒業55年の節目の年に当り、杉山一彦君の機械系同窓会・会長就任のお祝いと東日本大地震被災地への復興支援の訪問をかねて、母校の在る仙台地区で実施することにしました。春先から計画を練り始め、5月に日時と概要を決めて全員に予告、8月に開催案内の葉を作成して機械科35のメールサロンに掲載し、9月末に会費前納と出欠確認を行いました。

同級生は卒業時55名、卒業後の55年間での死去、行方不明者(1)は10名で、残りの45名の内、2/3以上に当たる32名の参加が確認できました。

喜寿を過ぎてもこれほど多くの同級生が全国各地からはるばる仙台に集まり、同級会を開催できるとは卒業時には想像が出来ませんでした。

改めて長寿社会を実感し、幸せを感じました。



第一幕 第一場 ～片平キャンパス

10月21日。秋晴れの穏やかな日差しの中、12時集合の1時間ほど前から、集合場所の片平北門会館のウッドデッキのカフェテラスに三々五々同級生が集まりました。

デッキは20名前後の級友たちが久しぶりの再会を楽しみ、学生当時の懐古にふける恰好の場になりました。

2階のレストラン”萩”で昼食後、同じ階の会議室(エスパス)で青木副学長による講演“東北大学の現状”を拝聴しました。大学は社会の要望に応える自主的、創造的な研究・教育を力強く指向しており、同時に優秀な人材を確保するための環境整備に非常に努力していることを改めて知りました。母校に帰ってきた安心感・親近感と共に、この大学を卒業したことへの誇りと喜びにひたれた時間でした。本部(旧理学部建物)前、懐かしの旧帝大機械・電気教室玄関前、魯迅が学んだ階段教室で記念写真を撮り、キャンパス内散策の後、チャーターバスで青葉山へ向かいました。



第一幕 第二場 ～青葉山キャンパス

片平から青葉山に向かう道中、大学広報の方に周辺の施設の案内をして頂きました。仙台市営地下鉄東西線がキャンパス内を横断し、地下鉄3駅が設置された川内、青葉山キャンパスはまさに巨大キャンパスで、自然豊かな広大な敷地の中に新装なった建物群が溶け込んで、アカデミックな雰囲気を出しておりました。この素晴らしい環境で勉学できる今の学生が羨ましく思いました。青葉山では“災害科学国際研究所”と“工学部機械系厨川研究室”を見学する機会に恵まれました。

[災害科学国際研究所]

2011年3月の東日本大震災を経験した大学として巨大災害に対応していくために設立されました。文理融合による実践的防災学の研究拠点形成の推進と災害科学の深化による国際貢献を目的としております。研究所棟の竣工が2014年11月で、実際の活動が軌道に乗り始め、「トリプル・テンの津波被害予測システム」(越村俊一教授)の運用を始めています。源栄(もとさか)正人教授による「東日本大震災の実態と教訓」と題しての講演も拝聴しました。地震・津波によるインフラ破壊、地球温暖化(海水温度上昇)で巨大化する台風・集中豪雨等による環境への影響が無視できなくなった現在、研究成果が世界あるいは地域の災害軽減に実効的に貢献出来る日が近いと確信しました。



[工学部機械系厨川研究室]

機械分野と異分野融合のカリキュラムの多さに驚きました。特に機械と医学分野の融合が顕著で、ナノ微細粒子の特性を利用した表面処理(レンズ加工)、表面創成(歯や骨等の生体機能低下を補うもの創り)の理論と技術開発は勉強になりました。厨川教授の講義と実験室見学もあり、大学院の短期体験入学のようでありました。機械系研究棟の前で卒業50周年記念で寄贈したソーラーパネル付き外灯を入れて、記念写真を撮りました。



第二幕第一場 ～懇親会(松島大観荘)

午後6時ホテルに到着、ホテルで待っていた5名と合流し、7時宴会開始。記念撮影、幹事からの歓迎の挨拶、暫しの団欒の後、近況報告を全員一分間スピーチで行いました。

・現役なみにこれまでの経験を活かして地元の企業や自治体に顧問等で貢献している人。

・趣味(旅行、絵画)やスポーツに体力の衰えと戦いながら更なる向上を目指している人。

・古文書、俳句、英語版での読書、仏教哲理の探求等、精神的文化を楽しんでいる人、等々

各人各様でしたが、熱中するものが老化防止に効果があるというのが共通の認識でした。



宴会の終盤は明善、有朋、日就寮の元寮生グループサウンズによる寮歌の競演、最後は全員輪になっての“青葉もゆるこのみちのく”の大合唱で、おひらきとなりました。

第二幕第二場 ～松島から石巻へ

翌10月22日朝8時ホテルを出発、五大堂、瑞巖寺境内を観光。ガイドの話では東日本大震災の津波で海岸通りの商店街は軒並約1mの床上浸水の被害に遭遇し、瑞巖寺では参道の松並木の最奥まで海水が流れこんだものの本堂には到達しなかった。が、名勝の松が海水の影響でかなり枯れてしまっていたのが残念でした。

石巻では、津波の被害が最も大きかった門脇地区から北上川河口に架かる日和大橋を渡って女川に入りました。門脇地区は海岸に向かって広がった平地で、石巻市の古くからの住宅地帯でしたが、津波により人家はほとんど押し流された地域です。現状は瓦礫こそ片付いているものの草茫茫の更地と化し、復興もまだまだという感じでした。



第三幕 ～女川原子力発電所(女川 NPS)

女川の町に入り、町のほぼ中央に町立病院が建っている小高い丘(海拔12m 位)に上り、津波で壊滅的な被害を受けた町跡を眼下に見下ろしました。

その我々の頭上を越える高さまで津波の濁流が流れ込み、全ての建物・家屋等を呑み込んだ当時の惨状を想像すると身の毛のよだつ思いに駆られました。

女川の町からバスに揺られて40分、昼過ぎに発電所に入りました。発電所の所長は偶然にも東北大学出身で、我々機械科の20年後輩(57年修士課程卒・萱場研)でした。彼の自己紹介を聞き、同窓のよしみというか親近感のある雰囲気になりました。

所長から東日本大震災の折、完全に安全を保ったことに世界の関係者から称賛されていること、2017年4月以降の運転再開を目指して進めている工事について説明を受けました。その後、屋外の防潮堤の嵩上げ工事や地下式の貯水槽建設工事の状況を、屋内では原子炉建屋、タービン建屋の運転床面の状況を見学しました。

最後に、我々先輩の方から、現在の異常気象の原因になっている環境問題を解決するには原子力は必要なエネルギー源であり早期の運転再開を期待している、女川では福島と違って、東日本大震災の巨大地震津波にも耐えて安全に停止したことに自信を持って原子力の安全について声を上げてほしい、等の激励の雰囲気の中で見学会を終了しました。



終幕(カーテンコール)

・母校は今どうなっているのか、どこに向おうとしているのか
・東日本大震災で甚大な被害を受けた被災地の今はどうなっているのか
・原発の再起動について社会的議論が高まっている中で実態はどうか
を今回の同級会の三つのモチーフ(動機、主題)にして実施しました。関係者のご協力も頂いて、参加者も十分満足しての散会となりました。最後に俳句歴9年の川嶋君が自分の訓練のために読んだと、次の三句を送ってくれましたので、紹介して報告の締めくくりと致します。

- ・ キャンパスに 五十五周年同級会 研究と実学熱く還りぬ
- ・ 三一一(さんいちいち)被災地復興遅滞なるを 深き傷みせ海静かなり
- ・ 原発の 二十九メートル防潮堤 施工の奥義重厚長大

[完]